音楽の才も幼児期に養われる

大脳の最も発達する生後の三年間は、同時に最も多くの物事を吸収し、身につける時期であることを世の母親たる者は、よくよく覚えておく必要があります。

世界的なヴァイオリニストを何人も育てられた鈴木鎮一先生は、次のようなことをおっしゃっています。

「生まれたばかりの赤ちゃんに、毎日、美しい音楽、たとえば、バッハとか、モーツァルトとか、とにかく名曲を、すぐれた演奏家によるレコードで、毎日何回か聴かせるのです。それは必ず同じ曲のレコードでなければいけません。そうしますと、その赤ちゃんは、半年くらいでメロディーも、リズムも、そして音楽のセンスもちゃんと身につけてしまうのです。

それをためすのは簡単です。毎日聴かせている曲の前に、もう一つの別の曲をつないだテープを作って、それを掛けるのです。そうしますと初めて聴く曲の方は“おやっ”というようにじっと聴いていますが、次に、毎日聴いている曲に移りますと、途端に、目を輝かして、“ああ、いつもの曲だ”と言いたげの表情で、母親の方を見てニコッと笑います。そして体をゆすって、リズムに合わせ、踊るような様子を示します。これは、生後六か月で、その音楽を身につけた証拠です」

鈴木先生は、

「ベートーベンは、決して生まれつきの音楽の天才であったのではない。父親が優れた音楽家であり、そのため優れた音楽を、生まれ落ちた時から繰り返し聴いて育ったから楽聖になれたのだ。もしも披が、音痴の親に育てられたとしたら、必ずや音痴になっていたに違いない」

と、おっしゃって、音楽家としての才能は、生まれつきではなくて、環境にあり、育て方にあるのだ、と断言されました。それで、名曲を“反復して”聴かせることの大切なことを強調されているのです。